

→ヤジルシ

太田省吾

構成

登場人物

- プロローグ 光景（薄明かりの中で） 男 1
- 1 天井のシミ（矢印が現れた） 2
- 2 夜の街（人は考えつつ歩む） 3
- 3 どこいくの 4
- （さまよえる羊そしてブタとキツツキとクマ） 5
- 4 夢見る男（大丈夫な犬） 女 1
- 5 人はなにがしないでいられないか（魚のように） 2
- 6 雨の中（ムチャクチャタンゴ） 3
- 7 21世紀の人体（目は動くか、足は上がるか） 4
- 8 布の中で（生まれのはじめ） 5
- 9 誕生（この世で出会うもの）
- エピローグ ここにいる（星空の下）

舞台

われわれが日々用いているさまざまなものの堆積が、舞台床面を形成している。つまり俳優たちはその上を歩き行動することになる。（ものは黒く塗料をかけられ、それぞれの色の個性は消されている。）

原則として、舞台上で使用する道具は、この堆積から持ち出されていく。

——— 舞台美術 島 次郎

プロローグ 光景（薄明かりの中で）

地鳴りのつづく中、さまざまな音が混じる。（建物の破壊、多勢の足音、モーターのうなる音など）

舞台床面の、ものの堆積が、薄明かりの中に浮き上がる。

やがて、堆積の中で、新聞紙が開かれる。

あちこちで、新聞紙が開かれていく。

堆積の中のテレビ画面に光が入り、

やがて、映像が映りはじめる——焦点のぼやけて判然としない画像、風景、街並、人々の顔など。

新聞紙が破られる。あちこちで。人々の不機嫌なぶつぶつ声。

人の声——どうやら新聞記事を読んでいるらしい。

人の顔に仮面が現れる。声が重なっていく。

モニターに、文字がゆっくり流れる。

「盗用テキスト——」

今朝の朝刊各紙記事。

掲載広告。

などなど」

文字、街並みなどの画像に消される。

捨てられた新聞紙で、床面かなりの面積が覆われる。

舞台上方から、黒い水滴が落ち、新聞紙の上に矢印が描かれていく。人々の不機嫌なぶつぶつ声がつづく。

モニターの映像プツリと消える。

仮面の人々姿を消す。

一人の男が舞台奥に立つ。

人々、男の視線の先を見にゆるゆると集まる。

やがて、人々の塊が解けていく。

一人の女が舞台下手前に立ち、遠くを眺める。
人々、女の視線の先を見にゆるゆると集まる。

人々の動きが（音楽の中）反復される。
人々の姿、やがて散っていく。

Ⅰ 天井のシミ（矢印が現れた）

モニターに、文字がゆっくり流れる。

「盗用テキスト——」

ゴンブロヴィッチ 『コスモス』

黒井千次 『群棲』

パスカル 『パンセ』

『天文学辞典』

ベケット 『ロツカ・バイ』

などなど」

遠くはなれて、男一と女一の顔が穴からのぞいている。

男一、女一の通話、間遠にはじまる。

男一 ……生きていたのか。

女一 なんて声。……いたのね。

男一 いた？

女一 いたのね。

男一 おれの言うセリフだ。

声が途切れる。

女一 なに……。

男一 ……。

女一 きこえてる？ 雑音……。

男― もしもし……。

女― どのくらい経つのかしら……わからなくなっちゃった。

男― おい……もしもし。

女― うん……。

男― なにがへうんなんだ。

女― ……もしもし。

男― あやまれ、まず、あやまれ。

女― どうして。

男― そうだろ。置き手紙もなかったんだぞ。

女― ……。

男― え、そうだろ。

女― ……ろ、ろ、老眼鏡。

男― ……なんなんだ。

女― だ、だ、墮胎。

男― どこにいるかもわからないんだし。

女― し、し、下着

男― ……。

女― あやまります。

男― なにをあやまるんだ。

女― わるかったわ。

男― りんご。ゴリラ。ラッキョウ。梅。

梅。目高。傘。酒。毛。毛抜き。肝。百舌鳥。

女― ずるい、ひとりでつづけて。

男― て、て、手袋。

女― ろくろ。

男― ろうそく。

女― 靴。

二人のシリトリにカがこもっていく。

男― 積木。

女― 雉。

男― 地下足袋。

女― びく。地下足袋なんて、苦しそうね。年齢がわかるわよ。

男― よ、よ、よし。

女― 植物の葎ね。

男― 寝巻。

女― 狐。

男― 根。ねっこの根。

女― 葱。

男― ……銀河。

女― ……銀河……が、が、骸骨。

男― ……杖。

女― 絵巻物。

男― ……のみ。

女― ……どっちの、大工さんの？

男― いいだろ、どっちでも。

女― み、み、ね……ミルク。

男― ……

女― やめないで。やめちゃだめ。ミルクよ、ク、ク。

男― 櫛。

女― 白髪。

男― 蛾。虫の蛾。

女― ガラス。

男― ス……ス……巣、鳥の巣。

女― 西瓜。

男― 蚊。虫の蚊。

女― ずるい……あなたの。亀。

男― 飯。

女― 鹿。

男― カ、またカか。

女― やめないで。

男― 紙。

女― 味噌。

男― 空。……なんで、出ていった。

女― 空……ラ、ラ、ラララーラ、ラララーラ。

男― あやまって、そして答えろ。

女― きて、ここに。……あやまるわ、そして答えます。

男― どこにいるんだ。

女― だから、それが教えてくれるわ。

男― ……。

女― きたんですもの、あたし、それに浴って。

男― ……。

女― あたし、言ったわ、雨もりかしらって。あなたが、あの天井のシミ、ほらラクダの恰好に見えないか、やせたラクダだって言った日よ。でも、ラクダは脚が長い動物よ、どこに脚があるの。魚かな、エラの大きな。魚かしらねって合づち打ったわ、あたし。

そしたらある日、矢印かな、そうあなたは言った。あたしは、もう一度言ったわ、魚かしらって。そしてらあなた、矢印だとするとなにかを指しているわけだって。

…あの日から、あたしたちにとって矢印になった。そして、どんどん矢印らしく育っていった。…きこえてるわね。

男― ……。

女― 窓の鍵開いているわ。あたし、そこを出てきたんだもの。

男― 窓…窓出たら扉があるぞ、裏の家の。そして、物置小屋…なあ。

女― ……。矢印だったわ、それ。

男― 不幸なのか、お前。

女― え……なぜ。

男― なにか、ある、わけだろ。

女― あっちゃんいけない？

男― ……。

女― ……なくちゃいけない？

男― なくていなくなるのか。

女― いなくなっていないでしょ。

男― 隠すのか、ほんとのところを。

女― ほんとうって？

男― ……。

女― ほんとうなんて言葉言わないで。きたならしい。

男― ……おい。

女― ……うん。

男― なにかへうんなんだ。

女― 自分に向かってひとりごろ。……だれの言葉だったかしら。

男― なにか。

女― えっ……。

男― どれが……。

女― なに。

男― だれの言葉かっていったら。

女― なにが。

言葉が途切れる。

女― 生まれたきたわ、あたし、この世に。

男― ……わかってるよ。

女― (子供同士のように) おいで、おいで。お星さん、見えてるわ。言葉ない。乙女座は地球から四一〇万光年、光に乗って四一〇万年。

男― ……。

女― 裏の家の物置小屋の庇すゝのところで見つけました、二番目の矢印。切れるわ。

男― 待て、十五秒。

女― だれの言葉だったかしら。

男― なにが……。

電話切れ、ツイッターという音が残る。

2 夜の街（人は考えつつ歩む）

男1、穴から全身を現す。

あたりは、堆積のひろがり。

男1、堆積の中に矢印を探りながら、歩き（這う）はじめる。

モニターに文字

「盗用テキスト——へー999年12月3日の新宿での、ある女性の行動」などなど

道をゆっくり歩む、人影。

男1、道へ近づく。

女2、手提げ鞆と二つの紙袋を持って、やってくる。

女2、ふと立ち止まり、考え、ゆっくり紙袋Aから紙袋Bへ、ビンを移す。
歩き出しかけるが、再び考え、ゆっくりビンを紙袋Aへ戻す。

歩きはじめる。

男1、歩く女2へ近づこうとする。

女2、立ち止まる。なにごとか考えている。

紙袋Aをのぞき、手提げ鞆から雑誌を取り出し、Bへ入れ、しばらく考えてからAへ移し、なにごとか考え、Aから果物を取り出し、手提げ鞆へ入れ、歩きはじめる。

女2、男1に気づく。男1、目を外らす。

女2、モニターを見る。

モニターに女2の行動が映る。

モニター映像切れる。

女2、荷物を見、しばらく考える。

女2、手提げ鞆と二つの紙袋を持ちかえ、歩み出す。

女2、行動を反復しながら歩む。

女2の姿消えて行く。

3 どこいくの(さまよえる羊そしてプタとキツツキとクマ)

男2(老人)が、一歩一歩道の凸凹に気を配りながら、現れる。

男1、男2を遠く眺めている。

男2、息をつぎ、立ち止まり、男1を見る。

男2、突然背を伸ばし、息をつめて、敬礼。

男1、戸惑。

男2、姿勢を崩さず、返礼を待っている。

男1、仕方なく、敬礼。

男2、手を下ろし、荒い呼吸。

モニターに、文字がゆっくりと流れる。

「盗用テキスト——」

作者不詳『わが羊の人生』

J・ジョイス『ユリシイズ』

アンデルセン『マッチ売りの少女』

婦人公論『一九九九年五月、ある女性の手記』などなど」

女二人、男一を見る。

女3 ……シメシメ。

女4 シメ、シメ。

女が二人、男一へ近づく。

男一 あの……いいですか。

女3 探してるのね。

女4 女、ね。でしょう。

男一 ……ええ。

女3 だれなのさ。

女4 きまつてる、あの人だよね。

女3 あの人か、あの人だって。

女4 ……うん、教えてあげるわ、教えるかわりにあたしにつきあって。

男2、遠くで、敬礼。

息をつめたまま動かない。

三人、仕方なく、敬礼。

男2 (荒い息) あの方と言わんか、ブタ共。……あの方のおられぬ……おられぬ……おられぬ……なに言う。おられるぞ、厳として。……おられぬ世は存在せんのだ……あの方のおられぬ世はだれ一人考えたことがない……だろう。それがどのような世であるか……だれも、だれ一人……。これは偉大なことだ、これこそ……偉大ということだ。ヨシ……。

男2、息を止め、勢いよく両手をあげ、無声で万歳、万歳。

男2、万歳をつづける。顔が赤くなっていく。

三人、仕方なく、万歳、万歳。

男5、ハシゴを抱えて現れ、あたりに大きな足音を立て歩きまわり、去っていく。

男2、崩れ、荒い息。

女4 ……なんだっけ。

女3 うん、この人のあの人の話。

女4 あ、そうそう。(男1へ)つきあってくれるんだったよね。

女3 そしたら教えてあげるわ、知ってることはみんな、ね。

男2、遠くで声をあげる。

男2 お前は、ブタか羊か。(指を一人一人へ)ブタか羊か。

男1 ブタである、小生は。

女二人、男1の勇気を見る。

女3 あたしキツツキ。キツツキになありたい、百年の木に穴あけたい、タタタタ、タタタタ……。

女4 クマだ。クマになりたい、三百年の木の穴で冬眠したい。

女3 ナメクジになりたい。

女4 ゴキブリになりたい。

男2、ゆっくり起き上がる。

男2 あの方は、あの方でおられる。いまは冬眠をかこっておるがな、わしも。遠い先を見ておるといふことだ。ブタにはわからん、ブタは極度の近眼なのだ。お前らはブタだ。

男1 ブタだ、ブタだ。なぜブタなのかわからないけどブタだ。

女3 キツツキだ。

女4 クマだ、メスグマだ。

女3 ナメクジだ。

女4 ゴキブリだ。

男1 お前は、何だ。

男2 ……おれこそは羊だ。小生こそ最優秀の羊である。羊の精力の盛んなことを知っておるか。羊の睾丸には、三代四代先のメスへ向かう欲望が備わっておる。さずかった力だ。……あの方は、それに数倍する精力を備えられておられる。……この地球上で、この力は他に例を見ない力だ。どこに例がある……。

男2、息をつめ、万歳、万歳。

男2の顔、赤くなっていく。

三人、やはり仕方なく、手をあげていく。万歳、万歳。

男2、堆積の上へ崩れおちる。

三人、男2へ近づく。

男2 ……心配か。……おれは首の皮一枚あれば生き返る、あの方と同様にだ。……放っておけ、ブタ共の世話にはならん。立派に立ち上がり、歩みをつづけるぞ。

三人、男2から遠ざかる。

女3 ……なんだったっけ。

女4 ……うん、この人あの人の話。

女3 あ、そうそう。(男1へ) つきあってくれるんだったよね。

女4 そしたら教えてあげるわ、知ってることはみんな、ね。

男1 なににつきあえばいいんだ。

女3 あたし、この人を殺そうとしたんだ。

女4 ……少しおおげさに言えばね。

女3 あいつとこいつが、いるとこ見つけたんだ。……二人をね、殴ってやった。あいつのシャツを破ってやったし、こいつのTシャツも破ってやったの。ふと気づいたら、いつのまにかあいつがいなくなっているね、こいつと二人つきりになってた。……ね。

女4 ……うん。

女3 あたし、この人を罵倒ばとうしていました。でもそうしてるうちに気づいたの。どこかで聞いた言葉ばかりしゃべっているじゃない、あたし。気づいたんです、罵倒するのも自分の言葉でできないのかって。それに気づいたら気が抜けて口が動かなくなってる。

女4 静かだった、あの時間、ね。沸騰しているお湯で、部屋中湯気で……あたし、やっとそれに気づいて止めました。

女3 わたしたち、そのお湯で、カップラーメン食べました。ね。

男2、起き上がり、遠くから三人を眺めている。

女3 なんだから、なにをどうしたらいいかわからない気持。

女4 なんて、あたしブラジャー破られてるのか、なぜあの人をあの人だと思っていたのか……。

女3 あたし、提案したんです。さまよってみましようかって。

女4 さまよう………どういうことですか……あたしはききかえした。さまようのはもう充分って気がしませんがどって。

女3 ……。地球の一隅に、ある日ぼろり生れました。ぼろり、日本、1951年。

女4 ……で、さまようってどうすればいいの、ってあたし、あなたにきいた。

女3 口にしたことない言葉を口にすること。

女4 そうそう、そうか。でも、なんだろう、口にしたことない言葉って。

女3 ……うん。でも、爽快になる言葉がいいな、ね。

女4 あなた、〈これ〉って叫んだわ。

男2、去っていく。

二人、男1へ目を向ける。

男1、二人の話を聞いていたのだろうか。

男1 ……え。

女3 〈ちよいとにいさん、どこいくの〉これ。

女4 え……フフフ……うん、うん、うん、うん、なんだかいいなあ。ね、いいわね。もう一度。

女3 〈ちよいとにいさん、どこいくの〉 〈ちよいとにいさん、どこいくの〉

女4 ……うん、なんだか、いいなあ。

女3 5万分の一の地図の外へ出ていけるわ、この、セリフなら。

女4 うん、うん、別世界、別世界。

女3 それよ、それ。ね。

女4 そうでしょ。

男1 ……うん。ああ。

女3 着てるもの脱いだみたいね、全部。

女4 それよ、それ。爽快。

女3 世界地図をさまよってる気持。

女4 それよ、それ。ね、あんた、どう？

女3 へちよいとにいさんどこいくの、あたしの顔見ておくれ、体見ておくれへほら、あんたもさまよって
みたら。

女4 へあたしはこれよへ

女3 へいいさ、いいのよ、あたしにだってにいさんの顔見えやしないへ

女4 へお腹なかのアンヨはごきげんいかがへおっ、すごい。いいぞ、いいぞ。

女3 へごきげんいかがへ

男1 ごきげん、ごきげん、上きげん。

女二人 オツ、いいぞ、いいぞ。

女4 それじゃ、どっちかお選びよ。

女3 ……わかるかい、ちよつとしかちがわないけどね、わたしたち。でも、ちがうのさ、この人クマでゴ
キブリ、あたしはキツツキで、ナメクジ。

男1 二人とも欲しい。

女3 どうしよう。

女4 いいけどね。

女3 いいけど、どうするの。

男1、女3に近づく。

女3 ほら、^い粋な言葉吐いてよ、あたしをしびれさすような。

男1 粋な言葉……ちよっと待て、ちよっと。

女4 ちよいとにいさん、マッチ持っていない？

男1 マッチ……。

女二人、男の前へ。

女4 燃えてる間は、あんたは王様。なんでも、かんでものぞいていいのさ。

女3 マッチ持っていない？

男1 ……ライターならあるぞ。

女4 だれの言葉だったかしら。

女3 どれ、どれ、どれが。

女4 マッチじゃなきや、王様にさせないよ、ね。

女3 だめ、だめ。

男1 うるさいこと言うな。

女二人 掟を知らぬか、この別世界の、ハハハハハハ……。

女二人、男1へ飛びかかり、男1の目に布を巻く。

女3 ちよいとにいさん、きたんだね、ここまで、あたしたちのところまでさ。

女二人、自分で目隠し。

女3 さあさ、おいでよ、によっきりさせてあげるからさ。

女4 によっきりさせてあげるからさ。あら、もうによっきりしてるのかい。

女二人の笑い声。

男1、二人を追う。

女二人、手を拍ち、男1、それを追う。

目隠しした者同士の鬼ごっこ。

やがて、三人、互いに手を拍ち合って、自分の位置を知らせ合う。

三人、触れ合い、かたまる。

女3 どうしたらいいのかしら、涙が止まらない。

女4 ……ふーん。

女3 どうなの、あなた。

女4 なぜだろう、流れてる。

男1 おい……によつきりしてるぞ、おれは。

女3 止まらないの。

女4 流れる。

男1 抱いてくれ。二人とも抱くぞ。なにしてる。どこにいるんだ。肌が欲しい。

女3 きっと塩からくないよ、こんな涙。なめてみて。

女3、目隠しをとる。

女4、女3の目をなめる。

女3、女4の目隠しをとり、涙の流れている頬、首をなめる。

二人の目、男へ。

男、目隠しのまま、空気を察し後ずさる。

女3 なめてみて。

女4 逃げることはないでしょ。

男、逃げる。二人におさえられる。

男、カンネンして、二人の涙をなめる。

女二人、男の言葉を待つ。

男の言葉ない。

女二人、男からそれぞれの場へ離れ、寝ころぶ。

女3 ……ね。

女4 ……あたし？

女3 ……うん。

男1 ……おれか。
女3 ……うん。

やがて、女たちの言葉が宙に浮かぶ。

女3 ……ちよいとにいさん、どこいくの。
女4 ……ちよいとにいさん、どこいくの。
女3 ……さまよったね、ね。
女4 ……うん。
女3 気持ちよかったね。
女4 ……うん。
女3 ね、にいさん。

男1、ゆっくり起き上がる。

男1 ハモニカ、吹いたんだ。……おばあちゃん死んだ夜だった。……星の夜だった。
女3 ……そう。

女4 ありがとう……ね。

女3 ……うん。

女4 だれの言葉だったかしら。

女3 なにが。

女4 ありがとう。

女3 ……うん。

女二人、起き上がる。

女二人、道の交点に立つ。

女3 (女4へ) お別れだわ、あたしたち。

女4 ……はい。……うん。

女3、堆積の中から棒をひろい出し、立てると女4へコブシを差し出す。

二人、ジャンケン。

女3、棒から手を離す。

女4、棒の倒れた方向へ歩き出す。

女3、反対方向へ。

男1、二人の女からなにも聞かずにしまった。

男1 おーい、おーい。

男1、目隠しをとり、女たちを追っていく。

音楽が空気に満ちる。

モニターに光。

さまざまな映像のフラッシュの中、男2と女3、4、及びつい今しがたの男1の場面。

4 夢見る男（大丈夫な犬）

道の交差点に、一人の男の影。

モニターに、ゆっくり文字が流れる。

「盗用テキスト」――

p・アンテンベルク『セ・ラ・ヴィ』

岸田國士『女七蔵』

チエーホフ『妻への手紙』

アメリカ・インディアン口承詩

などなど」

男3、大きな荷物を下ろし、その上に腰を下ろし、街を眺めている。

女1がやってくる。

男3、女1を見つける。

男3 (遠くの女1へ) 逃げたりしないで下さい。……ちょっと立ち止って。

女1、聞こえた言葉に小さな異常を感じ取り、男へ向こうとする目を止めて立ち止まる。

男3 ……ありがとう、立ち止まってくれた。……じゃ、目もこちらへ向けてくれませんか。……いやなことはしやしませんよ。それに、退屈だっせやしません。

女1、目を向けない。

男3、荷物の中から、キツチュな飾りものを頭へ載せる。

男3 ナンダ、ナンダ、コリヤ……

男3、さらに荷物の中から、赤や黄色のキンキラのブルマを取り出しズボンを脱ぎ、はきかえる。

男3 ドウダ、ドウダ、ナンダロウネ、コリヤ……。

女1、男へ目を向け、小銭入れを取り出し、中を見る。

男3 ちょっと…… チョッチョッチョツ、チョッチョッチョツ……。

女1へ近づき、小銭入れをしまわせる。

女1、逃げる。

男3、鮮やかに女1を捕らえる。

男3 こわがらないで。こわがることないんだから。

女1 声あげるわよ。

男3 ……ああ、なんて言い方するんだ。ちよっと立ち止まって、話を聞こうかって気になってもらおうとしてる……ソレダケジャナイカ……。

女1 ……いいわ。手離して。

男3 ほんとうだね、聞く気になってくれたんだね、わたしの話を。……手を離したとたんに逃げたりしませんね。あ、ああそれから大事なことをもう一つ。……話を聞いて、すぐにへなあんだ〴〵なんて言わないで下さい。へなあんだ〴〵……いや、いいんですけどね、そう思っても。しかし、声にするのは少し、考えてからにして下さい。

女1、首をふる。

男3 ある日、男が勤めに出かけ、帰りの電車で窓に映った顔を見た。それは自分の顔だった。……これでおしまい。

女1 ……。

男3 ある日、ある女が台所にいた。彼女は夫に声をかけた。夫にはその声が聞こえなかった。……これでおしまい。

女一 ……ああ。

男3、女一の手を離す。

男3 彼は彼女を愛しているように感じた。彼女は彼を愛しかけた。彼は彼女を得た。娘が生まれた。……十年後、彼は彼女から遠ざかった。彼女は待った。彼は帰らなかった。五度目の春が来た。……娘は美しい少女になった。……彼は娘の眼を見た。その眼は淋しい怒りを含んでいた。

女一 これで、おしまい。

男3 ……もう少し……いいですね、もう少し。……彼は娘に黙って見つめられた。……彼は母親に眼を向けたその眼を見て、彼女が彼を愛していないことがわかった。

女一 ……。

男3 彼ははじめて彼女と見合った時の眼もこれだったのかと知った。時が流れていないように思えた。蠅が飛んでいた。それからまた多くの年が流れた。

女一 ……おしまいにしましょう。へこれでおしまい。

男3 ……もう少し、もう少し待ってください。ここまできてここで切られたら、つらい、つらいですよ。だって、そうでしょ。

女一 あたし、行きます。さよなら。

男3、女1を鮮やかに捕らえる。

男1がやってくる。

男3 ここからなんです。彼にはここから光が射してくる、いいですか。なんですか、この力は。
女1 離して、離しなさい。

男3、離れた手で女1の足をつかむ。

男1、走り寄る。

女1 シッ、シッ。

男3の動き、止まる。

男1、立ち止まる。

男3 なんだって……？（男1へ）あの音は、何だったんでしょう。わたしは犬じゃないんだよ、え、よく見てごらん、犬じゃないだろ。

男1 やめましょう、とにかく、ちょっと。

男3 え……ああ、どなたです。

男1 夫です、この……。

男3 わたしは、この人に教えなくてはならない。なにがしていいことで、なにがしてはならないことか。

男1 なんなんだ、いったい。

女1 ……こわかった、ぬるぬるして、この人の手。

男3 こわがることぐらい、アメンボだってやりますよ、クソをつけたブタだって。……この人はそれに劣る。

男3、二人に近寄る。

男1、女1の手を引いて後ずさる。

男3 動くな。この人は、わたしを犬だって言ったんですよ。老いぼれて皮膚病患ってクソつけて歩いてい
る犬だってね。

男3、女1へ手を出す。

男1、男3をおさえる。

男二人、堆積の上を転がる。

女一、そこらにあるものを手に、男3の背や頭を打つ。

男3、堆積物の上で上衣を頭からかぶり、動かなくなる。

男3 ……大丈夫、大丈夫です。……一つだけ確認させて下さい。わたしは今、人を殺しませんでしたよね。

男一 ……もう一度。

男3 ……なんです。

男一 なんていいました、あなた、今。

男3 今……。

女一、男一をつつく。

男一 ……いいえ。

男3 やっぱりそうか。よかった。夢を見ていたらしい。いや、ある女の人に人生の不思議を教えてください。たらね、突然わたしを犬だと言うんです。で、わたしは叱ってやっただけです。そうこうしているうちに殺してしまっただけ、臓物を食っていたんです。シツ……わかっています、夢を見たんだ。臭い臓物だった。

男3、上衣から出て息をつく。

男3 フツ、フツ……フツ、フツ……。フフフフ、フフフ……いやな夢から醒めた時ほど幸せだって思える
時はない。……つまり、わたしは、今幸せなわけです。

男3、立ち上がり、自分の歩む方向を探す。

グルグルグルと回り、ある方向へ指を。

男3 ラッタラッタラ……と。南西を向いてここへやってきて、と。……ラッタラッタラ……え、西へ行け
と命じるのか。……西か。西は、わたしたちに日没の深い意味を、成熟していく知恵を思い起こさせてく
れる。西の方角は、われわれを思慮深くさせる。

男3、去る。

男1、女1、薄明かりの堆積の上で見合い、体積の奥を眺めながら、身を寄せて腰を下す。
モニターに光。

さまざまな映像のフラッシュの中、男3と女1の場面が混じる。

5 人はなにがしないでいられないか（魚のように）

モニターに、ゆっくりと文字が流れる。

「盗用テキスト——」

宮沢賢治 『学者アラムハラドの見た着物』

古井由吉 『畑の声』

村上龍 『無敵のサザンオールスターズ』

西友セール広告

ブッシュアメリカ大統領演説

などなど」

人々、幼い遊びをしながらやってくる。子供の仮面をかぶせ合う。

男、女もかぶせられる。

自転車に乗った先生（女5）が勢いよくやってくる。

生徒たち、バタバタと先生の前へ。夕方、たそがれ時の丘。

女5 (女一の顔を両手で触れ) きたのね、あなた。その気になったのね。うれしいわ。(男一を見つけ)
あ、きみもいた。

女生徒α きたがっていたんです、前から、ね。

男生徒α 今日も、もじもじしてました。

女5 (生徒達へ) あなたたち、人の心を察すること、その大事さを学び、それを実行したのね。感心感心。さて、はじめましょうか。

先生、堆積の中からイーゼルと黒板をひろい出し、黒板に字を書く。

「火 水 鳥 魚 ↑」

そして、〈火〉に○印をつける。

女5 ……火に○をつけました。今日の授業はここからはじまります。……みなさん火というものはよく知っていますね。火は燃える時は焰ほのおをつくります。焰ほのおというものは、でもよく見ていると奇態なものです。形も色もずいぶんさまざまですね。……でも、それらはみなある同じ性質をもっています。いいですか、

火というものは軽いものでいつでも上へのぼろうのぼろうとします。それから、それは明かるいものです。照らそう照らそうとしています。それからもう一つは熱いということです。熱があつて乾かそう乾かそうとしている。……こういう具合に、火にはいくつかの性質があります。……では、なぜそうなのでしょう。……それは、火というものの性質だから仕方ないのです。熱いもの、乾かそうとするもの、光るもの照らそうとするもの、軽くてのぼろうとするもの、それを焰と呼ぶのだから仕方ないのです。

先生、〈水〉に○をつける。

女5 ……水です。みなさんよく知っていますね。水というものは、でもよく見ると奇態なものです。……そんな眼で見るんじゃないよ、意気地なし。意気地なしの助平。

先生の眼、堆積の一角に向かっている。

女5 自分で決めたことはなにがなんでもやりとげようとするのが男でしょ。言い出したのは誰だい、誰だったのよ。

堆積の上に寝ころんでいた男(男4)、宙へ声を上げる。

男4 おれじゃないだろ。おれだったのか。

女5 胸に手あてて思い出してみろ。

先生、生徒の眼に気づく。

女5 水は、水は物を……、水は物を……水は物をつめたくしますね。また水は物をしめらせませませね。……つめたくし、しめらせ……きみ、立ちなさい。水にはもう一つ大事な性質がありますね。それはなんです。

生徒、見合い、女生徒、立ち上がる。

女5 なんです、それは。

女生徒a ……あの、ちょっと。

女5 ちょっと、なんです。あなたは男として恥ずかしくないのですか。

女生徒にかわって、男生徒、立つ。

男生徒 a ……水は低いところへ下ろうとします。

女 5 ああ、そうです、よく気づきましたね。

先生の眼、生徒から離れる。

女 5 あなたは人の愛をどう考えているのですか。あの人は私を愛していた、いえ、今でも私を愛しているのです。その、あの人から私を奪って、あの人の愛はどのようなんです。なにが洞窟です。

男 4 その声が聞こえるたびに、ひろがっていくんだよ、この胸の洞窟が。

女 5 声ではないでしょ、言葉でしょ、あたしがぶつけてるのは。

男 4 きらいじゃないよ、きらいじゃないぞ。

女 5 ……ふーん。

女生徒 a ……先生、座っていいですか。

女 5 水にはもう一つの大事な性質がありますね、それはなんです。

女生徒 b ……。

女 5 それはなんです。

女生徒 b ……水は低いところへ下ろうとします。

女5 よく気づきました。お座りなさい。……水のつめたいこと、しめらすこと、下へ行こうとすること、それが水の性質なのです。どうしてそうなのでしょう。……あの人、あなたとの新家庭のための家具を買いこんで寝るスペースもないんだって叫んだのよ。あなたってあたしのことよ。あんたにわかる？ わかるわけないよね。

女生徒、手をあげる。先生、女生徒へ目を戻す。

女5 はい、なに。

女生徒b 水は、つめたく、しめらし、下へ行こうとします。それはどうしてでしょう。

女5 それは、そういう性質のものを水と呼ぶのだから仕方ないのです。

男生徒b 先生、先生、つぎは鳥です。

女5 え……ああ、鳥です。

男生徒b 先生、鳥に○をつけて下さい。

先生の手が動かない。女生徒、〈へ鳥〉に○をつける。

女生徒b わたしたちは鳥を知っています。鶯、みそさぎい、ひわ、かけす、からす、つばめ、などみんなよく飛びます。

女生徒a また、鳥はみんなよく啼きます。

生徒(全) 青空へ飛んでいく時はふるえる点のようです。林の中へ行く時はみな一心に啼いてまるで雨が降っているように聞こえます。

女5 それでは、なぜ鳥は飛び啼くのでしょうか。

生徒(全) 鳥はみな飛ばずにはいられないで飛び、啼かずにはいられないで啼くのです。飛ばずにはいられず、啼かずにはいられないものを鳥と呼ぶのだから仕方ないのです。

女5 はっきりしてよってことよ、あたしの言ってることは。まっすぐのまごころをあたしは求めているんだ。

男4 家具をそろえるのがまごころか。

女5 だからもっと大きなまごころをあたしは求めたんだ。

男4 きらいじゃないよ、きらいじゃない。

女5 もっとまっすぐに言えないの。

男4 その眼つきがきらいじゃない、狐みたいに眼をつり上げやがって。

女5 ああ、狐だよ、狐だよあたしは。でもあんたは男じゃない立派な男じゃない。

先生、男4の方へ歩み出そうとする。

生徒たち、先生の前へ立ちはだかる。

先生、狐になる。へコン、コンコン。

生徒たち、先生の乱れを吸収しようと、自分たちも吠える。

へコン、コン、ケーン、ケーン……ウォーン、ウォーン……

生徒の仮面が空へ向いている。

男4 きらいじゃないぞ、おれは狐がきらいじゃないからな。

男4、女5の自転車に乗って去る。

先生、黒板へ近づき、へ魚に○をつける。

女5 みなさん、魚を知っていますね。川ではフナ、コイ。海ではタイ、イワシ……川と海を往き来するの
もいますね。シャケなどです。魚もいろいろよく見ると奇態なものです。……でも、それらはみなある性
質をもっています。……魚というものは、よく泳ぎます。泳がないではいられないのです。

先生、へ↑に○をつける。

女5 さて……これです。これまでわたしたちは（チョークで示す）これらについて学んできました。火は熱く乾かし、照らしのぼる。水はつめたく、しめらせ、下る。鳥は飛び、また啼きましたね。そして魚は泳がずにいられないものでした。……さて、では、一体どうでしょう。鳥が飛ばずにいられず、魚が泳がないでいられないように、人はどういことがしないでいられないだろう。人が何としてもそうしないでいられないことは、どういうことでしょう。……考えてごらん下さい。

生徒たちの顔が、空へ。

女5 さ、君。答えてごらん。

男生徒b ……人は。

女5 ……答えて。

男生徒b 人は……歩いたり、ものを言ったりします。

女5 よく答えました。人は歩かないではいられない。もしみんな、歩けなくなったらどうだろう。泉まで歩いていって水を掬^{すく}つてのおむことができたならそのまま死んでもかまわないと思うでしょうね。……また人は、ものを言わないではいられない。そうね、頭に浮かんだり、頭につまったりしたことを言わないでい

ることは大変つらいこと。そのために病気になる人も多いのです。黙っていたり、声に出せないと言うことは本当につらいことなのです。

先生の脚、揺れはじめる。貧乏ゆすり。

女5 たしかにそう。……でも人にはそれよりもっと大切なものがないでしょうか。足や舌と取りかえてもいいほどもっと大切なものはないでしょうか。

生徒たちの顔、空へ。

女5 あなた、むずかしいけど答えてごらん下さい。

女生徒a ……人が……歩いたり、ものを言ったりするより……もつとしないではいられないのは……。それは善いことです。

先生の貧乏ゆすり、生徒たちへ伝染していく。

女5 よく答えました。すべての人は善いこと、正しいことを好み、そのために命を棄てる人もこれまで大勢いました。それは、火が熱く、上へのぼらなければいけないし、魚が泳がずにはいけないのと同じです。なに、君のその眼。なにか言いたいよね、言ってごらんなさい。

男生徒a ……人は、でもほんとうに善いことが、それがなんだかを考えないではいけないと思います。

先生と生徒たちの貧乏ゆすり止まる。

女5 おわり、おわりです、今日の授業。

男生徒a どうしたのですか。ぼくはいっしょうけんめい考えました。

女5 君がなまけているとがめましたか、先生。もう一度、先生の質問を考えてごらんなさい。

男生徒a 先生は、人は善いこと正しいことをしないではいられないとおっしゃいました。それは、魚が泳がないではいけないのと同じですとおっしゃいました。

女5 ええ、そのとおり。

男生徒a でも、先生はそうおっしゃりながら貧乏ゆすりをなさっておいででした。貧乏ゆすりは、言っていることと別の言いたいことがあって、それが神様に見つかって、神様がそれを見つけてらへてへおいおい〜って忠告なさっているんだと聞きました。へおいおい、おいおい……〜ぼく、歩けるようになったらすぐに貧乏ゆすりはじめていたそうです。

女5 ……聞こえていたわ、君の言うこと。……ね、みんなここへきて。

生徒たち、集まり、顔が並ぶ。

女5 いい……火は熱く上へのぼらなければいられないし、魚は泳がずにはいられず、鳥は飛ばずにいられないように、人はどういことがしないでいられないだろう。

先生の貧乏ゆすりが再発し、生徒たちに伝染していく。

やがて、全員の貧乏ゆすり。

黒い雨粒が降りはじめ、

騒音が湧き出して、しだいに高まっている。

生徒（全） 弱い人は助けなければなりません。正義は勝ちます。必ず勝ちます。すてきなワンピース買った、うれしい。我々の側に立つかテロリストの側に立つか、あらゆる国家は正義の側か悪の側に立つか立場を明確にしなければならぬ。ビール飲んだ、うまかった。芸術は国を超えて理解されます。戦争を望んでいる者はだれ一人いません。ヨーロッパを超えた味、あらびきグルメワインナー40グラム380円、安い。……。

黒い雨が激しくなり、人々散っていく。
男一、女一、仮面をとり、雨をあびている。

モニターに光。

さまざまの画像のフラッシュの中、
女5と生徒たちの場面が混じる。

6 雨の中（ムチャクチャタンゴ）

黒い雨の中。

モニターに、ゆっくり文字が流れる。

「盗用テキスト——

中島みゆき『家出』

TOTO『便器！ 説明文』

荒木経惟 『写真集センチメンタルな旅へ冬の旅』
などなど」

男―と女―、舞台のひろがりの中に放り出され、離れて雨をあびている。

男―、雨に濡れた上衣を脱ぐ。

女―、上衣、スカートを脱ぎ、スリッパ姿。

男― 会えたな。

女― ……うん。来れたのね、ちゃんと。

男― 来たよ。

女― ……いつかも、ね、会ったのよ、あたしたち。

男― ……ずいぶん昔だ。

女― そう、そうですね。でも、会ったわ。

男― 偶然だった。そりゃそうだけどな。偶然。

女― そりゃそう、どんな出会いだったね。でも、会ったわ。

男― あの時みたいだ、ほら、おれたちの棲家すみかをもった夜だ。

女― 帰ってきたみたい、あの夜に。

男― ずぶ濡れだった。

女― そう、そう。

男― 逃げることだ、二人になるってことは。

男5、防毒マスクをつけて現れ、あたりに大きな足音を立て走りまわり、やがて去っていく。

女― 逃げたわね。国境越えるみたいな気持ちだった。……家を出てきてくれないかと、あなたは言ったけど、なにも持たず出ていこうと、あなたは駅で待っていた。けど……あたしあなたのことだれかにほめて欲しかった。あなたの他はなにもいらなけれど、少しさみしかった。……覚えてる？

男― 逃げおわせて、うれしかった。さみしかったから踊ったんだ。踊ろうか、あの夜踊った。

女― 恥ずかしい、気狂いざた。

男― しかし、死ぬ時にはあの夜を思い出さず、あの気狂いざた。

女― そうかしらね、死ぬ時に……。

男― うれしかったんだ。

女― うん、そりゃそう、少しさみしかったけど。……交尾したのよ、憶えてる？ やっと借りた家の庭で、雨の中。

男― 気狂いざた、やろうか。

女― いいわよ。

男― ずぶ濡れで部屋に戻って。お前は抱えてきたレコードプレイヤーにレコードを載せていた。おれは酔いをさまそうとして、便器の使用説明書の文字をいっしょけんめいに読んだよ。「本体及び便座、便フタは取りはずせまですので全面を掃除できます。ただし、シンナー、クレンザーの使用はプラスチックを傷めますのでおやめ下さい」。トイレを出ると、部屋はなんとワルツの洪水だった。

女― 豪華にやりたかったのよ。精一杯豪華に。部屋にはなにもなくてガランとしていたんだもの。

男― 踊ったな、無茶苦茶ワルツ。

女― タンゴも踊った、無茶苦茶タンゴ。

男― 無茶苦茶ワルツと無茶苦茶タンゴは、つまり、同じ踊りなのであった。

低く、タンゴ（ロシアンタンゴ）が流れはじめ、流れていく。

女― （小さな声）……子供が生まれて、育った。

男― ……そして、家の中のバタバタする足音が消えたと思ったら、いなくなった。

女― 待って、そんなに早く時間を飛ばさないで。あたしたちうろろしているじゃない、毎日。

男― ああ……うろろしてるよ。

女― うろろしよう。

男― どうするんだ。

女― 踊りましょう、無茶苦茶タンゴ。

二人、タンゴの中、近づき、ダンスの姿勢をとる。

二人、タンゴを踊る。

女―、男―の肩へ歯を立てる。

男―、女―の肩へ歯を立てる。

二人、堆積の上を転がりながら、タンゴを踊る。

人々の影が、二人を眺めている。

二人のタンゴ、止む。

モニターに光。

さまざまな映像の中、男―、女―の場面混じる。

7
21世紀の人体（目は動くか、足は上がるか）

八つの仮面があらわれる。

モニターにゆっくり文字が流れる。

「盗用テキスト——

A・ジャリ『ユビュ王』

チエーホフ『三人姉妹』

CIA資料

などなど」

男 a クソツ。

男 b なにを見てる。

女 a あたし？ ……もちろん、あれ（二人）でしょ。

男 a クソツ。

女 c やめて、そのクソツっていうの。

男 a え……ああ。

女 c 賭けに敗けたの、この人、ね。

男 c なに賭けたんだ。

女 c うん、賭けるものなんかあるわけないでしょ。

男 c 相手は。

女 c うん、いるわけないでしょ。

男 1、女 1、見られる。

女 d あれ、でしょ。見せていただきましょ。

男 b はじめるか。

女 c 人類は20世紀を越えないってことに賭けたの、この人、ね。

男 a クソツ。

女 c やめて、なにも損したわけじゃなし。

女 a なぜなの。なぜ人類は20世紀を越えないの。

女 c 多くの罪を犯したからって、全滅に価する罪。

一同 笑う。

一同　ブハハハハ……。

女d　人類が全滅するわけじゃないでしょ。

男a　笑え。笑え。鏡見て笑え。

女d　哲学かしら。

男a　クソッ。

女d　ね、哲学やって下さらない。

男b　21世紀になれば、20世紀を通りすぎれば、この世の生活は想像もできぬくらいすばらしい、驚くようなすばらしいものになるでしょう。

仮面たち、男ーと女ーに近づく。

しばらく対面。

男a　クソッ、ながらえてるな。しかし一見ではわからんぞ。肉体の内部は、病いでスポンジ状。そう、20世紀を越えることができないのは、病い、各種の病いの蔓延によるとの考えも可能だ。よく調査しろ。伝染に気をつけてな。

女a　あたしたちに、伝染するの。ありうるのかしら。

女b　そりゃそう、あり得ません。

男 a クソツ。

仮面たち、二人に近づく。

男、男一へ手をのばす。

男一、さける。

女、女一へ手をのばす。

女一、さける。

仮面たち、さらに二人へ近づく。

男 b ……これなんだ、な。

女 a うん、21世紀の人体よ。

女 b 皮膚は異常なさそうね。

男 b ああ……見た目にはな。

男一 え……おい。

女一 え……あの。

女 c こんにちは。

女一 あ……こんにちは。(男一へ) あなた。

男Ⅰ あ……こんにちは。

男b、男Ⅰの手を持ち上げ、放す。

男Ⅰの手、宙に浮いている。

男b、となりの男cの手を持ち上げ、放す。

男cの手、ぱたりと下りる。

仮面たち、顔を見合わす。

女b、女Ⅰの目の前へ指を立て、左右に動かす。女Ⅰの目、動かない。

女b、となりの女cの目の前へ指を立て、左右に動かす。女cの目、左右へ動く。

仮面たち、顔を見合わす。

男a、二人へさらに近づき、女Ⅰへ鼻を近づけ、匂いを嗅ぐ。

つぎつぎに、仮面の鼻が二人へ。

仮面たち、顔を見合わす。

男a ……うん、なるほど。

女a なにが。

男a ……いや。

男 b クククク……

女 b クククク……。

仮面の二人、笑い出す。

男 c 説明しろよ。

女 c そうだわ、なによ。

仮面の二人、なんでもないと頭を振りながら笑う。

女 1 あの、あたしたち……。

男 1 じゃあつと……。

男 a 脳だからな、人体の中枢は。頭蓋を開けて精査しないことには……クソツ……やっかいなことだ。

女 a ズボン脱がすのはあたしよ。肉の記憶のなくなった人たちじゃもったいないわ、この役。

女 b 残ってますって、あたしにも肉の記憶。

男 b おれも、おれだってさ。

女 a、男 1 のズボンを脱がす。

女 d じゃ、このあいだのあれは、なに。

男 c ……なにやったんだ、お前。

男 d 興奮実験。

女 d あなた、なにも感じていませんでした。

女 c ちよつと待って、感じるのよ、この人、ね。だって、あの時、ね。

女 a ふーん、そうだったの、あんたたち。

仮面の女 a、男 1 の脚の肉をつまむ。

男 1 イタ……。

女 a 弾力ありよ。

仮面の男 b、女 1 の頬を指でつつく。

男 b 弾力あり……ああ、刺激されたぞ、肉の記憶が。

仮面の女b、男1の脚を持ち上げる。

仮面の男c、女1の歯を見る。

仮面の人々、あらためて、脚上げ、口を開いたままの二人を見る。

男b 負けということかな、お前の賭け。

男a 脳の検査をせずじまいじゃ、あきらめないぞ。人体の中枢は脳であるからして……。ノコギリないかな、な、電ノコ、どっかになかったかな。

一同、二人を見る。

女d 哲学やりましょ。

女b テツガク？

女d いかにかに生を得たか、この21世紀の人体たち。

女b それ哲学？

女c おもしろそう。

女d 哲学よね、生命のあり方を考えるんですもんね。生物学かしら。

男b え……ああ、立派な哲学です。21世紀の空気を吸った人体はいかなる生をうけた者か。人類学かな。

女a じゃ、あなたとあなたでやってよ、あの役。感じたんでしょ、興奮したんでしょ。

女c はい、やらせていただきます。ね。

男b え……。

女a うれしいわよね、この役。人間をつくるんだよ。

男b ……ああ、うれしいよ。うれしいけど、つくるって……。

仮面の女c、男bの手を引き、舞台中央へ。

モニターに光。

さまざまな映像の中、男1、女1の場面が混じる。

8 布の中で（生まれのはじめ）

女cと男b、堆積の中から白い布を引き出す。

モニターにゆっくり文字が流れる。

「盗用テキスト——

小川国夫『血と幻』

埴谷雄高『生命・宇宙・人類』

シェイクスピア『ハムレット』

NHK料理番組〈男の食彩〉

横光利一『花園の思想』

などなど」

男bと女c、白布の中へ。

二人、仮面を剥ぐと、その下からもう一つの仮面。

(俳優の顔をした仮面)

男1、女1、二人を見ている。

女c シャケだったの、あたしの今朝の夢。

男b ……そうか、幸せだったな。

女c どうして、よくわかるわね。

男b メスだったんだろ、シヤケの。

女c ばかね、そりゃそうよ。

男b オスに追っかけられたんだろ。

女c よくわかるわね、そうなのよ、そうだったの。

男b なん匹で追ってきたんだお前を。

女c うん、三匹。あれはへんな感じね。三匹に追っかけられた。

男b 幸せだったんだろ。

女c うん、あたしだったら幸せだって思うかもしれないけど、あたしじゃなくて、シヤケだったからね、

あたし。オスたち、すごい顔して追ってくるんだよ。

男b ふーん……。

女c 色恋とか……そんなような目じゃないの。あたしが好きだとか、あたしの卵に精子かけたって追っかけてくるんならよかったんだけど。……あたしを選択していかない。彼らにとって、あたしはただそこに
いるメスってこと。でも、その目見たら、すごいよ。殺しにくるような目。

男b ……で。

女c でって。

男b 興奮しなかったか。

男b、布の中で仰向けになる。

女c、男の上へ乗る。

女c うん、もちろん興奮したわ。……でも、あれ、なんて言えばいい興奮だったのかしら。あたしシヤケだったのよ。必死だった。流れる水の中で、石をかきわけてシツポで窪みつくったり。

男b やろうかな、シヤケ。

女c あんな目できないわ、すごい目よ。……ずっと遠い海から追っかけてきて、河の流れにさからって必死で追いかけて、最後の最後で成功するのは一匹。二匹は精子をかけそこなうのよ。

男b ……シユー、シユー、シユー……。

二人、布の中を泳ぐ。

男b シユー、シユー……ブルルン、ブルルン……。

女c なに、それ。

男b 射精だろ。わからないのか。

女c どっちだった。成功したの、かけそこなうたの？

男 b お前、死ぬんだろ、産み終わったら。

女 c あんたもよ、射精終わったら、死んでね、あおむ仰向けに河の底流れていくのよ。

男 b お前は、死ぬのが怖くないのか。

女 c ええ。

男 b お前は、生きたいとは、ちっとも思わないのか。

女 c あたし、死にたい。

男 b 今、お前は、どっちなんだ。シヤケか。人間か。

女 c、分娩時のようにうめく。

女 c のうめき声の中、白布が引き上げられ、二人の姿が隠されていく。

9 誕生（これはなに？）

モニターにゆっくり文字が流れる。

「盗用テキスト」

産院での見聞体験

ベケット『わたしじゃない』
などなど」

白布がさらに引き上げられ、幅を広げていく。

幅の広がった白布に裂け目。

男一と女一の顔が、それぞれの裂け目からのぞき、身体が現れる。

男一、安らぎの時を得る。

女一、安らぎの時を得る。

男一、幼い姿で世界へ目を向ける。

女一、幼い姿で世界へ目を向ける。

男一、裂け目へ首をつっこむ。

女一、裂け目へ首をつっこむ。

二人、あらためて出てきた世界を眺める。

オルゴールの音がきこえ、やがて街の騒音。

小学校の校庭。鳥の声などが二人を包む。

音が変化していく。モーター音や工事現場の音などが二人をおそう。

白布引き上げられていき、騒音消えていく。

二人、見合う。

エピソード ここにいる（星空の下）

タンゴが、歪んだ音で二人を包む。

タンゴ、消えていく。

モニターに、文字がゆっくり流れる。

「盗用テキスト——

黒井千次『郡楼』

へ1999年12月3日の新宿での、ある女性の行動
などなど」

女―、男―へシリトリをしかける。

女― ……ろ、ろ、老眼鏡。 ……だ、だ、墮胎。し、し、下着。

男― りんご。ゴリラ。ラッキョウ。梅。…梅。目高。傘。酒。毛。毛抜き。肝。百舌鳥。

女― ずるい、ひとりでつづけて。

男― て、て、手袋。

女― ろくろ。

堆積の上を女2、手提げと二つの紙袋を持って、やってくる。

(以下、〈2〉と同じ動作)

男― ろうそく。

女― 靴。

男― 積木。

女― 雉。

男― 地下足袋。

女― びく。地下足袋なんて、苦しそうね。年齢がわかるわよ。

女―、ゆっくり未知の道をたどるように遠ざかっていく。

男―後を追っていく。

女2袋をのぞいている。

男―、女―のシリトリ、叫びになっている。

男― よ、よ、よし。

女― 植物の葎ね。

男― 寝巻。

女― 狐。

男― 根。ねっこの根。

女― 葱。

男― ……銀河。

女― ……銀河……が、が、骸骨。

男― ……杖。

女― 絵巻物。

男― ……のみ。

女― ……どっちの、大工さんの？

男― いいだろ、どっちでも。

女― み、み、ね……ミルク。

男― ……。

女― やめないで。やめちゃだめ。ミルクよ、ク、ク。

男―と女―の姿消えていく。

女2、手提げから出したビンを紙袋へなどの動作。

二人の声が、遠くでつついている。

男― 櫛。

女― 白髪。

男― 蛾。虫の蛾。

女― ガラス。

男― ス……ス……巣、鳥の巣。

女― 西瓜。

男― 蚊。虫の蚊。

女― ずるい……あなたの亀。

男― 飯。

女― 鹿。

男― カ、またカか。

女― やめないで。

男― 紙。

女― 味噌。

男― 空。……

女― 空……。

モニターに、女2の姿。

女2、モニターに目をとめる。

モニターに映った自分の姿、行動をふりかえる。画像切れる。

女2、歩みをつづける。

遠い堆積の上に男2、3の姿。

やがて、その他の人々の姿が現れ、定まらない方角へ目を向ける。

音楽、高くひびく。

男、女の姿も、人々の中に。

人々の姿、音楽の中に消えていく。

底本

『太田省吾 劇テキスト集(全)』

二〇〇七年九月十四日 初版発行

早月堂書房

『せりふの時代』二〇〇二・秋号

小学館